

藤香会だより

第21号
平成28年7月1日発行
発行者
藤香会事務局
092-724-0007
発行責任者
毛屋 嘉明

平成28年度総会が開かれる Ⅲ 諸議案を承認 Ⅲ



山崎 拓 会長
時より会員70名の出席、委任状提出者94名をもって鳥飼八幡宮集会所で開催されました。

5月29日(日)11時より

山崎拓会長は、雨の中を70名の出席をいただき、総会を開催できることは喜ばしい。一昨年の大河ドラマで活発な活動を展開したが、今後どのような活動をしてゆくか、また当会の存在意義を高めて行くかが課題である。総会で皆さまのご意見を賜りたいと挨拶された。

毛屋副会長からは、昨年度より会のあり方を、7回に及ぶ常任理事会で検討して本年度の基本方針を決定した。

1. 主な決定事項

(1) 新役員

- 名誉顧問 黒田長高
- 会長 山崎 拓
- 副会長 毛屋嘉明
- 監事 木下 正・田中雅美
- 理事 (事務局長) 田島満行
- (総務) 原 俊樹・篠原カズエ
- (広報) 天本孝久・平田善積
- (会計) 浜田泰祐・秦 紀子

(2) 年間行事

年間行事としては、藩主の法要は例年の通りですが、ゆかりの神社の大祭などは従来の3社に加え、住吉神社、太宰府天満宮、宮崎宮、警固神社、宗像大社に参詣することとしています。歴史勉強会、史跡巡りは例年通りの実施です。

〈神社大祭 参詣八神社〉

- 光雲神社 ・ 太宰府天満宮
- 鳥飼八幡宮 ・ 宮崎宮
- 紅葉八幡宮 ・ 警固神社
- 住吉神社 ・ 宗像大社

⑤ 会計報告に各行事の会計を含ませる。これらの項目を実施するには費用もかかるため、賛助会員制度を設け、広く企業・団体にお願います。

役員人事では、村松伸哉氏(研修担当)の退任と新理事に三野原信二氏、徳永良子氏が選任

2. 卓話

演題「如水公墓石の碑文について」

講師 作家 示車右甫氏

※講師プロフィール

示車右甫先生は、「天草回廊記」シリーズの著作のほか「対馬往還記」「天草興亡記」などを著された歴史作家です。また、先生が学ばれた博多工業高等学校では、当会の顧問であられました故中島敏行氏の教え子でもあります。本名を富永祐輔さんと言います。福岡市出身の有名な彫刻家富永朝堂は大叔父にあたります。



如水公墓石を撰したのは景轍玄蘇和尚であるが、彼は鎮西探題北條兼時に属した河津新四郎隆業の3男で、隆業は大内義隆に仕え、大友攻めに功があった。宗像郡上八村の承福寺で得度してその住職となった。その後聖福寺の住職となり、そこを辞して島井宗室の紹介で対馬宗家の外交僧となった。文禄・慶長の役では朝鮮に渡り、そこで如水公に出会ったものと思われる。そのような縁で碑文を書いたのではなからうか。

碑文は三千有余の文字からなり、播州飾東郡で生まれ、その人となり書かれている。そして信長に仕えたこと、やがて秀吉に従ったこと、荒木村重に幽閉されたこと、備中高松城の水攻めの様子、続いて山崎に明智光秀を討ったこと、その功で豊前6郡に封ぜられたなどが述べられている。朝鮮の役についても如水が小西行長と論争したこと、行長が如水の言を聞かなかったこと、結果的に敗れたことなどが記述されている。慶長7年に太宰府に退休したこと、9年春に病に臥し「一期に臨みて一種の和歌を詠ず、その声、未だ絶えず、端然として逝く」と記す。

忠之公・如水公の法要

忠之公及び光之公、治高公の法要は忠之公命日の2月12日、長高様出席の下、東長寺で行われました。卓話はご住職藤田紫雲和尚の「東長寺と黒田家」と題してお話をいただきました。

この法要の模様の一部がJ・COMテレビで「時空の旅人」領民の領民の平穩を願った大名 福岡藩二代藩主 黒田忠之(30分番組)として5月に放映されました。

如水公の法要には長高様初め会員61名が位牌の前で焼香をしました。

法要に先だって長高様は光雲神社と桜井神社に参詣され、当会から毛屋副会長、天本理事が、黒田奨学会から伊達理事と田中事務局長が同行いたしました。



◀如水公法要

職住の諸氏、藤田紫雲、田島長、東長寺のお話を聞く



会員クリック¹⁸



圓應寺 副住職 三木 英信

圓應寺は黒田如水の夫人・光姫(照福院殿)の開基した黒田家菩提寺です。筑前国の名刹、中本山(触頭)として知られていました。しかし福岡大空襲で本堂をはじめ諸堂、寺宝の数々がすべて灰燼となりました。中には快慶作の阿弥陀如来像や当寺を菩提寺とする玄洋社総帥頭山満翁寄進の大前机、徳川家康公より賜った白い短刀などもありました。わずかに、辯財天堂と防空壕に持ち込んだ過去帳や略伝書だけが残りました。

福岡城の築城と同時に光姫は、藩主である息子長政の城と次男熊之助が命を落とした玄界灘がよく見渡せる大手門で黒田家の菩提寺に圓應寺は落慶しました。

そして小倉にいた天蓮社真誉上人見道和尚を開山上人として招きました。開山を請け負った真譽上人は播州赤穂、武門赤松氏の流れを伝える名家で黒田家とは同郷です。播磨では心光寺第二世住持として浄土の法門を講じ、如水の慈父職隆の葬儀式では引導導師を務めました。また如水の参謀の一人であったとも伝えられ、黒田家とは縁深き人でした。下ノ橋御門をくぐり、三の丸御鷹屋敷と圓應寺を行き来する光姫は、福岡城築城中、死期の近づいた如水にその完成を一目見せたいと、長政夫人栄姫(大涼院殿)とともに

に諸士に握り飯をふるまった故事も伝わっています。

また、圓應寺所蔵の「圓應寺代々略伝」には興味深いことが綴られています。「如水公卒シ夫人乃チ剃染ス道ヲ以テ傳法戒師ト為ス崇奉加厚シ」つまり最愛の夫、如水が亡くなったのを機に光姫は出家したと書かれているのです。

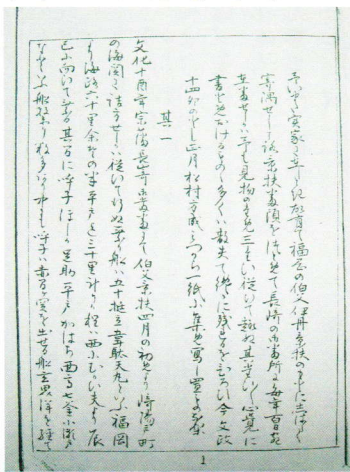
後に息子長政を看取った四年後の1627年(寛永4年)8月26日福岡城内で死去(享年75歳)しました。法名は「照福院殿然誉浩栄大尼公」。

圓應寺の山号と同じ「照福」には、福岡の行く末を見守り照らすという、黒田藩祖・如水夫人の願いがこめられています。山門に彫られた藤巴紋とともに今も光姫が福岡を見守る息づかいが聞こえてくるようです。

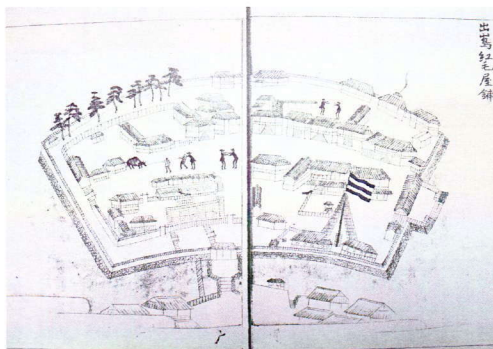
ちょっとうんちく

福岡藩は佐嘉(佐賀)藩と一年交代で、長崎警衛を行って、多くの武士・足軽(1回につき約1000人)が1年を4交代で長崎に向かっています。

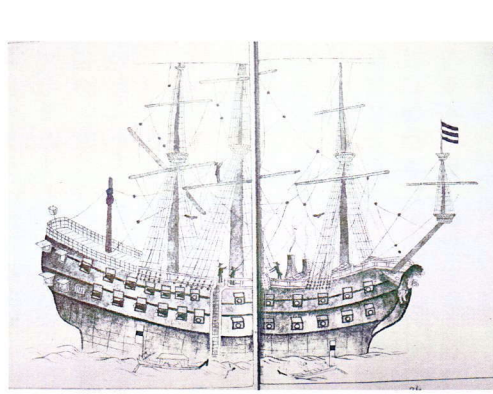
景扶番頭を勤めて長崎の御番所に毎年百日ずつ在番せしかば、予も見物のため三度従いて赴ぬ。その度々心覚えに書留めおけるもの多くは散失して、纔かに残れるを拾い、今、文政十四卯の年正月松村方成自ら一紙に集め写し置ものなり「乗り船は五十挺立章駄天丸」で、「福岡から海路六十里余」である。経路は「呼子 ほしか 足助 平戸 かはち 西高 七釜 小瀬戸」を通つ



ていことが記されている。平戸については「松浦侯の御城下なれば殊に賑へり、山の出崎に城ありて海中に臨めり」とその様子を書いている。平戸の先に九島内があり、「五里が間九十九の小島ならびその嶋みな



奇巖盈たるうえに、幡松枝を連て海に臨めるさま、いと興あり。あらあら松島の景に似たりとぞ、さもあるべし。その奇絶、誠に目を驚かせり。」とその光景を記す。松村方成は見学のため伯父の伊丹景扶に付いて行っている物珍しい所を余すところなく書き綴っている。



ただ、福岡藩は長崎から西洋の情報いち早く取り入れることもできた。松村方成は出島のオランダ商館長に接待され、西洋の酒や肉料理が出たことも記している。

「予未だ実家にありし時 故ありて福岡の伯父伊丹景扶のもとにしばらく寄寓せし頃、

外国船が頻繁に入港するようになり、その都度追加の人員や船・武器などが必要となつて財政はひつ迫した。

ただ、福岡藩は長崎から西洋の情報いち早く取り入れることもできた。松村方成は出島のオランダ商館長に接待され、西洋の酒や肉料理が出たことも記している。

ただ、福岡藩は長崎から西洋の情報いち早く取り入れることもできた。松村方成は出島のオランダ商館長に接待され、西洋の酒や肉料理が出たことも記している。

編集後記

発行が遅くなりましたことをお詫びいたします。今回の会員クリックは如水公室の菩提寺である圓應寺の副住職に執筆していただきました。光姫の命日に当たる8月26日は法要が執り行われます。(天本)

ホームページアドレス <http://toukoukai-kuroda.com/> 藤香会 検索

★新規入会員紹介
平成27年11月、28年6月までのご入会者ご芳名
平成27年 11月 吉田 征則
平成27年 11月 添田 千賀
平成27年 12月 郡 基博
平成28年 4月 八山 直幸
平成28年 4月 小川 義晴
平成28年 5月 熊本 米秋
平成28年 6月 宗像大社 (賛助会員)

